

## 肢体不自由児の職業意識に関する一研究

—普通児との比較, 自己評価との関連で—

西口 和実・三澤 義一

### 問題と目的

近年の低成長経済下においては、障害者の就労は非常に困難を極めており、また障害が重度化・重複化しつつある傾向が、これを一層複雑なものにしている。このような現状を打開するためには、社会的、行政的側面からの働きかけも必要であるが、他方、肢体不自由児に対する教育の意義も無視することはできない。すなわち職業教育と関連した進路指導、フォローアップなどの問題が極めて重要となってくるが、そのような立場にたった研究はほとんどなされていない。

19世紀末、Parsons, F. によって開始された職業指導 (Vocational Guidance) は、その普及とともに理論的にも発展し、現在では、Super, D. E. の「職業的発達理論 (Vocational Developmental Theory)」が主流となっている。この理論では、職業行動 (vocational behavior) を貫くものとして自己概念 (self-concept) を設定し、この自己概念の変容にしたがって職業興味に変化し、職業経歴が形成されていくとしている。それまで「職業適性」などを中心として考えられてきた職業指導に「発達」という概念を導入し、教育の重要性を再認識させたという面で、この理論の果たした役割は大きい。しかしその中核を成す「自己概念」について、定義の曖昧さ、操作の難かしさなどの問題点も指摘されている。その後これらを克服しつつ、その理論の実証を試みた研究も数多くなされている。たとえば Korman (1966; 1967a; 1967b) は、Gelfand (1962) にしたがって自己評価 (self-esteem) を、「自分自身についての特有な評価、また個人として自己をどうとらえるかということ」と定義した。そしてこの自己評価が高い者と低い者とで職業選択に相違が見られることを明らかにし、自己評価が職業行動の調整変数 (moderator variable) として作用すると述べている。

ところで肢体不自由児 (者) の自己概念は、Rogers の適応理論との関連で注目され (Dembo et al., 1956;

小西, 1970), 特にその障害に対する態度、障害受容 (acceptance of disability) などの側面は、個人の心理状態や適応の重要な指標となりうると言われている (Wright, 1960; 加藤, 1966; Meyerson, 1974)。また肢体不自由児 (者) の特性として、「非現実的態度 (unrealistic attitude)」が指摘され (Cruickshank, 1971), これは職業選択の際に顕著にあらわれてくるとされている。そしてこのような非現実的態度は、自己について客観的な認知ができていなかったり、障害受容が良くない場合に生じてくるという (Garrett, 1966; 渋沢, 1966)。これらの点に関し三澤 (1974) は、最も核心的な問題は、障害の現状をも踏まえた現実的な、健全な自己概念を確立させることである、と述べている。また佃 (1976) も、現実との関係で、自己概念の適切さを吟味するための援助が、職業指導の重要な側面であると指摘している。さらに東京都肢体不自由養護学校・心身障害学級進路指導委員会 (1976) は、新しい進路指導の考え方を示唆し、社会へ送り出す側の学校としては在学している生徒全てに対し、自分の障害という壁にぶつかりながら、障害とたたかう態度を育てることが教師の義務であると主張している。

以上のような考え方から、肢体不自由児の将来の進路、職業を考える場合、自己概念という問題は普通児以上の重要性をもってくと考えられる。そこで本研究はこれらの点を踏まえ、以下の点について検討することを目的とする。

- (1) 肢体不自由児の職業意識を、職業興味、種々の職務を遂行していく自信、という2つの側面からとらえ、これを普通児と比較する。
- (2) 肢体不自由児、普通児それぞれを、自己評価\*の高い者、低い者に分け、これらの違いが職業意識に影響するか否かを検討する。

\* 本研究で言う「自己評価」の定義については、手続き及び方法において述べられる。

## 手続き及び方法

### 1. 被験者

肢体不自由児：東京、千葉、埼玉の肢体不自由養護学校高等部生徒103名（男女）。

普通児：新潟県の公立高校普通科、農業科、被服科生徒117名（男女）。

これらの中から分析方法に応じ、Table 1~4 に示されるような被験者群を構成した。

注1) 職業意識の場合、都市部と農村部といった地域性による相違が考えられる。本研究で用いた被験者はこの点を考え、肢体不自由児群と普通児群とで、その居住地域に差異が生じないように配慮されている。

注2) 肢体不自由児はI Q75以上（教師により推定された者を含む）の知的に障害が無い者に限定した。

### 2. 測定法

#### (1) 職業意識の測定

職業研究所編（山下他，1974）の職業レディネステスト（Vocational Readiness test：VR test）をもとに作成した。VRテストはSuperの理論に基づいて、我が国の中・高生用に開発されたもので、3種の下位検査から成る。この中のA検査（職業興味）とC検査（職務遂行の自信）とは、全く同じ内容の39の項目で構成されている。そしてこれらの項目は具体的な職業場面について記述されており、「興味」の場合ならFig. 1、「自信」ならFig. 2のように5段階で評定される。そしてこの39項目が、Table 5に示される8つの職業クラスターに分類され、各クラスターごとの合計点を求め、個人プロフィールが描かれる。本研究ではこの39項目を、肢体不自由児に理解されやすいような表現に改め、さらに職務

Table 1 分析1の肢体不自由児群の被験者構成

	男	女
N	30	30
I Q	101.53	101.13
I Q Range	90~130	80~127
C A	17歳6か月	17歳5か月
疾患 (人)	C P	18
	ポリオ	8
	その他	4

Table 2 分析1の普通児群の被験者構成

	男	女
普通科	15	15
職業科	15	15

遂行が比較的容易と思われる内容の項目を追加した。この6項目の内容は、身体障害者の職能検査として用いられるタワー法の作業見本などから選択し、これらを第IX職業クラスターとした（Table 6参照）。こうしてそれぞれ合計45項目、9職業クラスターから成る、職業興味と職務遂行の自信を測定する質問紙が作成された。

#### (2) 自己評価の測定

自己概念（self-concept）、自己評価（self-esteem）、自己認知（self-perception）などの用語は、研究者や、その研究目的によって定義がまちまちで、また各用語間に重複があるなど、多くの混乱をきたしている。そこで本研究では、遠藤他（1974）や菅（1975）らの自己評価の定義、及び自己概念についてのWylie（1974）の理論にしたがって、「自己評価」を以下のように定義し、用いることにする。すなわち「自己評価とは自己概念にとりもなる価値的感情で、自己の諸要素をいかに認知し、価値づけるかということ」である。

上述のように定義した自己評価を測定するために「自己評価インベントリ（Self-Esteem Inventory：SEI）」を作成した。これを、①能力的側面、②社会的側面、③心理的側面という3カテゴリに分け、さらにいくつかのサブ・カテゴリを設定した。①と②はWylieの言う自己概念の要素としての「自己の能力の認知」「他者や環境との関係における自己の認知」を測定しようとするもので、③は、従来「心理的障害受容」として理解

Table 3 分析2の肢体不自由児群の被験者構成

	自己評価：高	自己評価：低
N	14	14
男：女	7：7	7：7
SEI	139.6点	105.2点
I Q	97.8	95.0
I Q Range	80~130	75~111
C A	17歳11か月	17歳7か月
疾患 (人)	C P	11
	ポリオ	2
	その他	1

Table 4 分析2の普通児群の被験者構成

	自己評価：高	自己評価：低
N	14	14
男：女	7：7	7：7
SEI	146.3	102.6
普：職	8：6	9：5

Table 5 VRテストの8職業クラスター

クラスター名	項目数	特 徴
I 機械・技術	5	機械・電気等の仕事で、ある程度の専門技術を必要とする理工科系の男子むきとされている仕事が多い。
II 研究・管理	4	高度な知的能力およびある程度の技能が要求される専門的な職業で、しばしば自主性と自律的な判断が要求される。男子むきとされている仕事が多い。
III 自然・医療	5	ある程度の専門的知識が要求される技術的な仕事で、医療技術に関係したものと、自然(動植物)を相手にするものがある。
IV 対人・社会	6	対人接触の多い職業で、ある程度の専門知識を基礎として、本人の努力次第では個性を伸ばす機会も求められる。人間的な暖かさや愛情が要求される。
V 社会・芸術	5	第IVクラスターと同様、対人接触の多い職業であるが、第IVが個人を対象としていたのに対し、ここでは社会集団を対象とし、その意識や行動をとらえることが必要とされる。第IVより個性と独創性が要求される。
VI 事 務	4	いわゆる事務的な仕事で、作業内容はある程度きまりきったものが多い。それだけに注意深さと根気が必要。
VII 対 人・サービス	4	対人接触が多いサービス関係の仕事で専門的知識はあまり必要とされない。
VIII 手工・技能	6	ある程度の専門的スキルが要求される技術的な仕事で中心で、どちらかといえば女子むき。

山下他 (1974) に基づいて作成

されていた概念に相当するものである。この③の項目は、中司 (1971) らによって、これまで肢体不自由児(者)のみに実施されてきた内容を、普通児にも適用できるものに修正したものである。

このような構成のSEIを作成するために、Cooper-smith (1956), 齊藤 (1960), 栗原 (1971) などの研究を参考に、上述のカテゴリ内容を表わすと思われる104項目を選択した。これらの項目について、肢体不自由教育に携わる研究者11名に次のような3点について妥当性の検討を依頼した。(i) これらの項目が上述した能力、社会、心理の各側面の内容を表わしているか否か。(ii) ある側面を表わしている項目に関しては、それがそれぞれの側面のどのサブ・カテゴリに入るか。(iii) その項目の「方向性」を明らかにする。これはたとえば能力的側面なら、その項目は能力が高いことを表わすのか、低いことを表わすのか、という問題である。こうして11名

Table 6 第Ⅷ職業クラスター(技能・単純)の6項目

番号	内 容
4	取引先などからくるたくさんの封書、ハガキなどを必要に応じて分類したり、郵便物にあて名を書き、封筒に入れるなどの仕事をする。
11	タンス、鏡台などの家具を作ったり、木製のおもちゃを作ったりする。
18	テレビなどの電気製品を組み立てるために、工場で電線を配線したり、ネジをしめるなどの仕事をする。
22	鑑賞用の花を栽培したり、庭に植える樹木を育てたりする。
30	七宝を焼いたり、貴金属を使って、ブローチ、ペンダントなどのアクセサリを作る。
35	本や新聞を印刷するために、活字を組んだり、校正をしたりする。

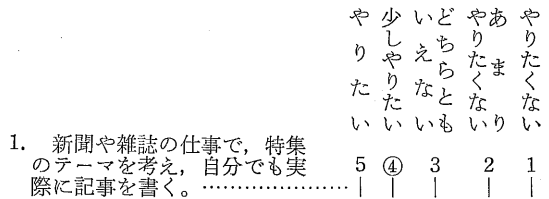


Fig. 1 職業興味テストの5段階評定例

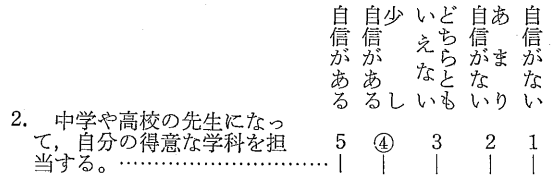


Fig. 2 職務遂行の自信についてのテスト5の段階評定例

中8名以上が一致した項目の中から41項目を選び、Lie-Scaleとして9項目を加え、50項目から成る5段階評定のインベントリィを作った。さらにこの信頼性を検討するため、都内の公立中学の3年生41人に予備調査を実施した。Lie-Scaleや記入もれ等をチェックして、その36人分の資料について折半法により信頼度係数を求めたところ、 $r_{xx'} = .831$ を得た(Spearman-Brownの公式によって修正されている)。ゆえに信頼性に関しても問題は無いと思われる。このようにして作成したSEIの各サブ・カテゴリ別の項目は、Appendixに示されている。

### 3. 結果の処理法

#### (1)分析 1

普通児群との比較においては、肢体不自由児、普通児それぞれの男女4群30名ずつについて、職業興味、職務遂行の自信の9の職業クラスターの総点、及び各クラス

ターごとの得点の平均値、標準偏差値を求める。そしてこの平均値について、肢体不自由児と普通児という障害の有無(2)×性差(2)×職業興味と職務遂行の自信(2)という3要因の分散分析を行う。

(2)分析2

自己評価(SE)との関連においては、SEIの総点が高い者、低い者を、肢体不自由児群、普通児群それぞれ14名ずつ選び、SEの高い群、低い群を設ける。この4群の職業興味、職務遂行の自信について、9つのクラスターの総点、及び各クラスターごとの得点の平均値、標準偏差値を求める。この平均値に関して、障害の有無(2)×SEの高低(2)×興味・自信(2)の3要因の分散分析を行う。

4. 調査の実施方法、及び期間

各校の教室、図書室等で、肢体不自由児は5名~15名、普通児は約40名の集団で行った。①SEI、②職業興味、③職務遂行の自信の3種の質問紙を、原則として、①、②、③の順序で実施した。実施の際は筆者自身が調査校におもむき、各質問項目を読みあげ、必要に応じて説明

を加えながら評定させるといった方法をとった。

調査期間は1977年9月~11月であった。

結 果

1. 分析1 (肢体不自由児と普通児との比較)

職業興味、職務遂行の自信について、肢体不自由児群、普通児群の男女別に、各職業クラスター別の得点及び総点の平均値、標準偏差値を示したのがTable 7である。この総点の平均値について、障害の有無(2)×性差(2)×興味・自信(2)という3要因の分散分析を行った結果がTable 8である。また各職業クラスターの平均値についてもそれぞれ同様の分散分析を行ったが、この結果については有意差が顕著な第Ⅲクラスター(自然・医療)についてのみTable 9に示した。

総点についての分散分析では、主効果に関しては3要因の全てに有意差が見られ、交互作用は性差と興味・自信(B×C)に5%の有意差が、障害の有無と興味・自信(A×B)に有意差の傾向が認められた。

各職業クラスター別の分析結果では、障害の有無(A)

Table 7 肢体不自由児群、普通児群の男女の相違による職業意識テスト(興味と自信)の各クラスター別平均値、標準偏差値

職業クラスター				肢体不自由児		普通児	
				男	女	男	女
I 機械・技術 (5)	興	14.73 (4.82)	8.33 (3.20)	15.20 (4.70)	9.00 (2.77)		
	自	13.43 (4.74)	7.50 (3.14)	14.53 (3.56)	9.37 (3.27)		
II 研究・管理 (4)	興	13.67 (4.52)	9.27 (3.80)	13.47 (3.16)	9.43 (2.68)		
	自	11.20 (4.58)	7.13 (2.93)	11.77 (2.95)	7.93 (2.38)		
III 自然・医療 (5)	興	14.17 (5.05)	12.40 (4.24)	13.87 (3.67)	12.83 (2.94)		
	自	12.43 (3.99)	9.87 (3.83)	13.80 (3.28)	11.63 (2.61)		
IV 対人・社会 (6)	興	15.97 (4.04)	13.37 (4.26)	17.07 (3.60)	15.43 (2.59)		
	自	15.30 (4.75)	12.03 (4.42)	15.53 (3.61)	13.63 (2.97)		
V 社会・芸術 (5)	興	15.13 (4.54)	13.00 (4.94)	15.90 (4.13)	15.07 (3.20)		
	自	14.80 (4.32)	10.30 (3.57)	14.57 (3.85)	12.83 (3.26)		
VI 事務 (4)	興	8.93 (3.05)	10.36 (3.76)	10.53 (2.80)	12.23 (2.17)		
	自	11.06 (3.75)	10.53 (3.52)	11.33 (3.08)	12.13 (2.17)		
VII 対人・サービス (4)	興	7.87 (3.69)	11.73 (4.42)	9.02 (2.43)	12.23 (2.94)		
	自	8.50 (3.38)	8.50 (3.54)	10.80 (2.75)	12.63 (2.58)		
VIII 手工・技能 (6)	興	12.80 (3.82)	19.80 (6.42)	14.77 (3.99)	21.63 (3.97)		
	自	12.47 (4.34)	16.50 (5.19)	14.57 (3.98)	20.20 (3.15)		
IX 手工・単純 (6)	興	16.10 (5.04)	14.63 (4.11)	17.87 (3.78)	17.73 (3.30)		
	自	15.23 (6.09)	13.17 (3.64)	18.83 (3.54)	17.67 (2.62)		
総 点 (45)	興	119.33(24.96)	112.93(26.61)	127.73(21.44)	125.47(20.11)		
	自	114.47(26.54)	95.67(24.10)	125.77(20.41)	118.07(20.04)		

注 1) カッコ内の数字は標準偏差値。

注 2) 各職業クラスター名の後ろにあるカッコ内の数字は、そのクラスター内の項目数。

Table 8 Table 7 の総点に関する分散分析表

変 動 因		SS	df	MS	F	
Between	A (障害の有無)	11,179.2	1	11,179.2	13.908	P<.01
	B (性差)	4,637.5	1	4,637.5	5.769	P<.05
	A×B	879.2	1	879.2	1.094	
	error (b)	93,245.5	116	803.8		
Within	C (興味・自信)	3,720.9	1	3,720.9	19.091	P<.01
	B×C	1,187.5	1	1,187.5	6.093	P<.05
	C×A	612.4	1	612.4	3.142	P<.1
	A×B×C	192.9	1	192.9	0.990	
	error (w)	22,611.9	116	194.0		
Total		138,266.9	239			

Table 9 Table 7 の第Ⅲクラスター (自然・医療) に関する分散分析表

変 動 因		SS	df	MS	F	
Between	A (障害の有無)	40.016	1	40.016	1.639	
	B (性差)	212.816	1	212.816	8.715	P<.01
	A×B	4.817	1	4.817	0.197	
	error (b)	2,832.601	116	24.419		
Within	C (興味・自信)	114.816	1	114.816	22.922	P<.01
	B×C	14.016	1	14.016	2.798	P<.1
	C×A	33.750	1	33.750	6.738	P<.05
	A×B×C	0.418	1	0.418	0.083	
	error (w)	581.000	116	5.009		
Total		3,834.250	239			

に関しては、VI (事務)☆, VII (対人・サービス), VIII (手工・技術), IX (手工・単純) の4クラスターで有意差が、IV (対人・社会), V (社会・芸術) でその傾向が見られた。性差 (B) では「事務」以外のクラスター全てに有意差が認められ、興味・自信 (C) についても7クラスターで有意差またはその傾向が認められた。

交互作用について見ると、障害の有無と性差 (A×B) ではどの職業クラスターにも有意差は見られなかった。性差と興味・自信 (B×C) は4つのクラスターに有意差があり、障害の有無と興味・自信 (A×C) に関しては、III (自然・医療)☆, VII (対人・サービス), VIII (手工・技能) に有意差が見られた。

## 2. 分析2 (自己評価と関連)

職業興味・職務遂行の自信について、肢体不自由児群、普通児群の自己評価の高い者、低い者\*\*の各職業クラス

\* 有意差に関しては、☆印が付いているクラスターでは5%水準、他の無印のクラスターは1%水準であることを示す。

\*\* SEIの得点そのものに関しては、肢体不自由児群と普通児群とで大きな違いは見られなかった。

ター別の得点及び総点の平均値、標準偏差値を示したのがTable 10である。この総点の平均値について、障害の有無(2)×SEの高低(2)×興味・自信(2)という3要因の分散分析を行った結果がTable 11である。また各職業クラスターの平均値について同様の分散分析を行った結果は、IV (対人・社会) についてのみTable 12に示されている。障害の有無 (A) と興味・自信 (C) という要因は分析1の結果と重複するので、SEの高低 (B) だけに注目する。総点の分散分析では、SEの高低について1%水準で有意差が見られた。交互作用は、障害の有無とSEの高低 (A×B) に有意差は無いが、SEの高低と興味・自信 (B×C) ではその傾向が認められた。

各クラスター別の結果では、SEの高低により、IV (対人・社会), V (社会・芸術), VII (対人・サービス)☆, VIII (手工・技能)☆, IX (手工・単純) の5クラスターに有意差があり、I (機械・技術), II (研究・管理), III (自然・医療) の3クラスターに有意差の傾向が認められた。交互作用に関しては、障害の有無とSEの高低 (A×B) とで、IV (対人・社会), V (社会・芸術) に

**Table 10** 肢体不自由児群、普通児群の自己評価の相違(高低)による職業意識テスト(興味と自信)の各クラスター別平均値、標準偏差値。

職業クラスター	肢体不自由児		普通児		
	高	低	高	低	
I 機械・技術 (5)	興味	11.29 (4.80)	10.50 (5.19)	13.29 (3.71)	12.07 (5.02)
	自信	11.57 (4.52)	9.64 (4.12)	14.00 (2.59)	10.14 (2.90)
II 研究・管理 (4)	興味	10.21 (5.16)	11.36 (4.20)	13.21 (2.43)	10.64 (3.41)
	自信	9.14 (4.60)	7.57 (2.80)	11.00 (2.33)	7.21 (1.70)
III 自然・医療 (5)	興味	13.00 (4.31)	12.21 (3.76)	13.93 (2.76)	12.93 (3.57)
	自信	11.43 (3.74)	11.00 (3.87)	14.71 (2.43)	11.21 (2.78)
IV 対人・社会 (6)	興味	15.36 (4.25)	14.29 (3.56)	18.71 (3.41)	13.14 (3.85)
	自信	15.50 (5.46)	12.50 (4.10)	17.57 (3.22)	11.07 (2.81)
V 社会・芸術 (5)	興味	14.79 (4.18)	14.21 (5.29)	17.50 (2.82)	11.21 (4.57)
	自信	13.50 (4.75)	11.50 (4.53)	15.93 (3.69)	9.36 (3.50)
VI 事務 (4)	興味	10.50 (4.29)	10.29 (3.75)	11.71 (3.12)	10.71 (3.53)
	自信	11.29 (4.41)	10.36 (3.13)	12.79 (3.78)	9.93 (2.81)
VII 対人・サービス (4)	興味	11.93 (4.53)	9.57 (4.39)	10.79 (3.78)	10.29 (4.10)
	自信	10.93 (3.24)	8.14 (3.29)	13.07 (3.35)	9.43 (3.58)
VIII 手工・技能 (6)	興味	17.29 (7.18)	14.43 (5.69)	18.42 (6.34)	17.07 (5.31)
	自信	13.64 (4.15)	13.64 (4.15)	20.85 (4.66)	14.57 (4.94)
IX 手工・単純 (6)	興味	15.71 (4.88)	12.43 (3.13)	18.07 (2.37)	17.36 (5.61)
	自信	14.21 (5.27)	11.86 (3.56)	20.00 (2.73)	16.00 (4.77)
総点 (45)	興味	122.71(28.71)	107.71(26.04)	135.64(21.27)	114.93(24.29)
	自信	113.93(25.72)	96.21(21.26)	139.93(20.61)	100.57(21.06)

注 1) カッコ内の数字は標準偏差値。

注 2) 各職業クラスター名の後ろにあるカッコ内の数字は、そのクラスターの項目数。

有意差があり、II(研究・管理)にその傾向が認められた。SEの高低と興味・自信(B×C)では、II(研究・管理)☆に有意差、I(機械・技術)、VIII(手工・技能)にその傾向が見られた。

## 考 察

分析1の結果から、障害の有無(A)に関して有意差が認められる事務、手工・技能などでは、肢体不自由児の得点が低くなっている。これらは上肢機能の巧緻性を要求される職業であり、脳性まひが多い肢体不自由児には、その遂行がむずかしいと思われるクラスターである。また同様に肢体不自由児の得点が低い対人・社会、対人・サービスなどの職業は、多くの人と接することの多い職業である。それゆえ障害が visible である肢体不自由児の場合には、雇用の機会が少ない領域である。以上のような結果から、肢体不自由児が自己の障害特性を理解し、また社会的な状況をも把握しており、それらが職業意識に反映していることがうかがえる。

また障害の有無と興味・自信(A×C)という交互作

用に、いくつかのクラスターで有意差が見られる。この傾向が顕著な自然・医療について考えてみると、普通児群では興味、自信とも高い得点を示しているが、肢体不自由児群は興味は高く、自信は低い。このような違いが有意差としてあらわれていると思われる。このクラスターは医師や農業に代表される職業で、肢体不自由児にとって医師は非常に身近な存在であり、また園芸などの実習を通じ、農業も興味・関心を抱きやすいものである。しかし身体障害をもつ彼らには、実際のところ、農作業を行うことは容易ではないし、医師の場合もその職務遂行には高度の知識・技術が要求される。したがってこのような結果は、渋谷(1966)が指摘しているように、高等部という段階になると肢体不自由児は自己の障害を容れ、自己の職務遂行の限界を認識してくることを示すものと思われる。

分析2の結果から、SEの高低によって総点及び7職業クラスターに有意差が見られ、自己評価が職業意識を規定する要因であることが本研究において実証された。SEの高い者は低い者より、職業に対する興味、自信と

Table 11 Table 10 の総点に関する分散分析表

変 動 因		SS	df	MS	F	
Between	A (障害の有無)	4,470.5	1	4,470.5	4.816	P < .05
	B (SEの高低)	15,703.7	1	15,703.7	16.238	P < .01
	A × B	1,302.1	1	1,302.1	1.403	
	error (b)	48,271.6	52	928.3		
Within	C (興味・自信)	1,620.3	1	1,620.3	8.217	P < .01
	B × C	790.6	1	700.6	4.006	P < .1
	C × A	175.0	1	175.0	0.887	
	A × B × C	451.7	1	451.7	2.291	
	error (w)	10,251.9	52	197.2		
Total		82,407.4	111			

Table 12 Table 10 の第IVクラスター (対人・社会)に関する分散分析表

変 動 因		SS	df	MS	F	
Between	A (障害の有無)	14.286	1	14.286	0.522	
	B (SEの高低)	456.036	1	456.036	16.657	P < .01
	A × B	111.999	1	111.999	4.091	P < .05
	error (b)	1,423.644	52	27.378		
Within	C (興味・自信)	41.286	1	41.286	7.244	P < .01
	B × C	14.284	1	14.284	2.506	
	C × A	4.319	1	4.319	0.758	
	A × B × C	1.752	1	1.752	0.307	
	error (w)	296.359	52	5.699		
Total		2,363.965	111			

も高い得点を示した。自己評価のとらえ方に多少違いはあるが、このような結果の一部は、Korman (1967a) や Mansfield (1973) とも一致する。彼らの研究では、SEの高い人は低い人より、自分が選択した職業において必要とされる能力を、高度に有しているとみなす傾向があることが明らかにされている。すなわち、自己の選択した職務を遂行する自信が強い、ということである。

交互作用に関しては、障害の有無とSEの高低(A × B)とで、総点と3つのクラスターに有意差はまたはその傾向が見られた。これらの平均値を見ると、普通児群ではSEの高い者は低い者より興味・自信とも高い得点を示し、SEの高低により職業意識に大きな違いがあることがわかる。ところが他方肢体不自由児群では、SEの高い者と低い者とで、職業興味、職務遂行の自信ともあまり大きな違いは無い。このような結果から、肢体不自由児の場合は普通児と異なり、自己に対する認知の相違が、職業意識の相違に直接に結びつかないのではないかと、ということが示唆される。西口(1977)は、肢体不自由児の職業選択がその障害程度や知能の相違によって変わらないことから、彼らはその「肢体不自由」という

障害の概念だけに縛られてしまい、自己の特性や関心などを考慮することなく職業選択を行ってしまうのではないかと、という問題を指摘している。本研究の結果からもこのような傾向が存在することが考えられる。

Kormanはその一連の研究において、自己評価の高い人は職業選択において自己実現を図ろうとする、すなわち自己概念を職業行動と結びつけようとするが、自己評価の低い人は自己概念とは関わりなく、家族や友人の勧めにしたがって職業選択を行うという傾向を指摘している。そして彼によれば、自己評価の高い人は、自分を有能だと感じ、過去に欲求を満足させたという感情をもつものに対し、自己の評価の低い人は、自己の無力感や過去に欲求を満足できなかったという感情をもつという(Korman, 1966)。そしてこのような自己評価の違いが生じてくる原因としては、子供の時のしつけという問題が考えられ、親の制限や社会的制約を多く受けた子供は、満足したという経験をもつことができず、低い自己評価をもつようになるのではないかと述べている(Korman, 1966b)。

本研究では肢体不自由児の場合に、自己に対する認知

の相違が職業意識に結びつかないことが示唆された。この自己認知が現実の姿に妥当するか否かは別問題として、上述のような傾向は、Kormanの言う自己評価の低い人の職業選択の仕方と類似している。肢体不自由児が実際の職業選択に際して、教師や親の勧めに従うという傾向はしばしば見受けられる。しかしこれは、就労可能な職業が社会的に制約されているという状況によるところが大きい。とはいえ、本研究で示唆された、肢体不自由児自身の自己のとらえ方（自己概念）という問題も無視することはできない。各自の特性や関心をいかに職業に結びつけるかは、職業や社会状況について彼らに認識させることとともに、進路指導の重要な課題となろう。分析1の結果から、肢体不自由児が、自己の障害や社会の現状についてかなりの理解をもっていることも示唆された。しかしこれが単なる「あきらめ」に終らないよう留意しなければならない。実際に指導を行うにあたっては、多くの研究や実績を積み重ねることが、社会状況の改善とともに必要である。現時点では、重度化・重複化しつつある子供の進路をどうすべきか、という問題は暗中摸索の状態である。しかしKormanらの指摘を考えるなら、幼少時から家庭との協力を深めつつ、長期的な視野にたった指導を進めていくことの必要性が認識されよう。

## 要 約

肢体不自由児の職業意識を、職業興味、職務遂行の自信という2つの側面からとらえ、これを普通児と比較した。その結果、肢体不自由児の興味、自信が普通児より有意に低い職業クラスターもあり、これは上肢機能や対人接触を必要とする職業であった。また普通児に比べ、自信の得点が興味より有意に低く、これは自己の障害や社会状況を彼らが考慮しているということを示すものであろう。

また自己評価を測定するインベントリィを作成し、これが高い者と低い者として職業意識に相違があることが明らかにされた。しかし、肢体不自由児群ではこのような傾向は普通児群より小さく、自己に対する認知の相違が、直接職業意識に結びつかないことが示唆された。

## 文 献

- 1) Coopersmith, S. (1959) A method for determining types of self-concept. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 59, 87-94.
- 2) Cruickshank, W. M. (1971) *Psychology of exceptional children and youth*. Prentice-Hall, Inc. (2nd ed.)

- 3) Dembo, T., Leviton, G. L., & Wright, B. A. (1956) Adjustment to misfortune—a problem of social psychological rehabilitation—Artificial limbs, 3, 4-62.
- 4) 遠藤達雄, 安藤延男, 冷川昭子, 井上祥治 (1974) Self-Esteem の研究, 九州大学教育学部心理学部門紀要, 18, 58-36.
- 5) Garrett, J. F. (1966) Realistic vocational guidance. In W. M. Cruickshank (ed.) *Cerebral Palsy—its individual and community problems*.—Syracuse Univ. Press, 606-637.
- 6) Gelfand, D. (1962) The influence of self-esteem on rate of verbal conditioning and social matching behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 65, 259-265.
- 7) 加藤孝義 (1966) T S Tによる肢体不自由者の自己観について, 臨床心理, 5, 154-164.
- 8) 小西雅子 (1970) 肢体不自由児の障害受容に関する研究, 特殊教育研究, 7, 1-9.
- 9) Korman, A. K. (1966) Self-esteem variable in vocational choice. *J. appl. Psychol.*, 50, 479-486.
- 10) Korman, A. K. (1967a) Self-esteem as a moderator of the relationship between self-perceived abilities and vocational choice. *J. appl Psychol.*, 51, 65-67.
- 11) Korman, A. K. (1967b) Relevance of personal need satisfaction for overall satisfaction as a function of self-esteem. *J. appl Psychol.*, 51, 533-538.
- 12) 栗原輝雄 (1971) 肢体不自由児の目標設定行動における自己概念の安定性の役割に関する研究, 教育心理学研究, 19, 163-175.
- 13) Mansfield, R. (1973) Self-esteem, self-perceived abilities and vocational choice. *J. vocat. Behav.*, 3, 433-441.
- 14) Meyerson, L. (1971) Somatopsychology of physical disability, In W. M. Cruickshank (3rd. ed.) *Psychology of exceptional children and youth*. Prentice-Hall, Inc., 1-74.
- 15) 三澤義一 (1974) 心身障害者の職業について. 特殊教育, 7, 28-34.
- 16) 中司利一 (1971) 肢体不自由者を対象とする障害受容度診断検査作成の試み, 日本特殊教育学会第9回発表論文集, 107-108.
- 17) 西口和実 (1977) 肢体不自由児の職業選択に関する一研究, 運動・知能障害研究, 5, 47-64.
- 18) 斎藤久美子 (1960) 自己意識の分析による人格適応性の一研究, 心理学研究, 30, 277-285.
- 19) 渋沢久 (1966) 肢体不自由児の職業意識, 東京教育大学附属桐が丘養護学校研究紀要, 2, 113-124.
- 20) 菅佐和子 (1975) Self-Esteem と対他者関係に関する一研究——青年期を対象として——, 教育心理学研究, 23, 224-229.
- 21) Super, D. E. (1957) *The psychology of careers*.



New York: Harper and Brothers. (日本職業指導学会訳 (1960) 職業生活の心理学, 誠信書房)

- 22) 東京都肢体不自由養護学校・心身障害学級進路指導委員会 (1976) 進路指導の手引き, 日本チャリティ・プレート協会
- 23) 佃直毅 (1976) 障害者の職業指導, 職研, 17, 3-8.
- 24) Wright, B. A. (1960) Physical disability—a psychological approach.—New York: Harper and Row.
- 25) Wylie R. C. (1974) The self-concept. Lincoln: Univ. of Nebraska Press.
- 26) 山下恒夫, 道脇正夫, 渡辺三枝子, 松本純平 (1974) 職業レディネステストの開発, 職業レディネステストと関連諸変数, 職業研究所紀要, 7, 1-67.

**Appendix** 自己評価インベントリィのサブ・カテゴリ別項目

I 能力的側面……………計15項目

- (1) 知的能力……………5項目
4. 人間やものごとに対する観察力がすぐれていますか。
13. 新しいことを理解するのが早い方ですか。
19. 頭が良いと思いますか。
31. 学校の成績が良いですか。
41. 創造力がすぐれていますか。
- L.S. 44 (13) 新しいことはなかなか理解できませんか。

- (2) 身体的能力……………5項目
5. からだが丈夫な方ですか。
10. 体格ががっしりしていますか。
22. からだが疲れやすいですか。
37. 体力に自信がありますか。
47. 運動能力がすぐれていますか。
- L.S. 26 (5) からだが弱い方ですか。

- (3) 行動力……………5項目
2. 考えたことをすぐ実行に移せますか。
16. 積極的に行動しますか。
28. 決断力がありますか。
33. こうと決めたことは最後までやりぬきますか。
49. 活動的で、何でもてきばきとやりますか。
- L.S. 35 (2) 考えたことをなかなか実行に移せない方ですか。

II 社会的側面……………計12項目

- (1) 協調性……………3項目
1. たいていの人と仲良くやっていけますか。
32. 人とすぐうちとけて、友達になれますか。
43. 友達といっしょに何かするとき、気にいらないことがあってもがまんしますか。
- L.S. 15 (32) 人とすぐには友達になれない方ですか。

- (2) 責任感……………3項目

8. 自分に決められたことはきちんとやりますか。
27. 自分の言ったことやしたことに責任をもちますか。

39. 約束したことはいつも守りますか。
- L.S. 21 (39) 約束を守るのは苦手な方ですか。

(3) 他者理解……………3項目

6. 友達の長所や短所をよく理解していますか。
38. 他の人を思いやる気持ちが強いですか。
46. 人の意見や考えをよく聞いて、その人を理解しようとしていますか。

(4) 礼儀正しさ……………3項目

11. 言葉使いががていねいですか。
18. 電話の受け答えががていねいですか。
25. はきはきとあいさつしますか。
- L.S. 50 (11) 言葉使いが乱暴ですか。

III 心理的側面……………計14項目

(1) 自己の価値の確信…4項目

3. 目標をもって生活していますか。
14. 自分の人生をたいせつにしたいと思えますか。
36. 自分の能力を十分に発揮していると思えますか。
45. 自分という人間にそれなりに満足していますか。
- L.S. 17 (36) 自分の能力をまだ出しきっていないと思えますか。

(2) 劣等感……………2項目

9. 他の方が自分よりすぐれていると思えますか。
42. 自分をつまらぬ人間だと思えますか。
- L.S. 24 (42) 自分をすばらしい人間だと思えますか。

(3) 不安定感……………2項目

7. 他人にちょっとしたことを言われても気になっ  
てしまいますか。
40. ちょっとしたことでも気分が変わりやすいですか。
- L.S. 29 (7) 他人が何を言ってもあまり気にしない  
方ですか。

(4) 逃避……………2項目

11. いやなことがあると、一人きりでいたいと思  
いますか。
23. 現実とは違うことを、よく願ったり考えたりし  
ますか。

(6) 攻撃……………2項目

20. いらいらすると、よく親や友達にあたりちらし  
ますか。
34. 他の方のすることに、よくケチをつけたり批判  
したりしますか。

(6) 依存……………2項目

30. いつも誰かにいろいろな相談をしたいと思  
いますか。
48. ちょっとしたことでも誰かに頼りたいと思  
ってしまいますか。

注 1) 各項目の前の数字はインベントリィ中の番号を示す。

注 2) L.S.: Lie Scale, かつこの内の数字の裏返し  
の表現であることを示す。

## Summary

### A Study on the Vocational Consciousness of Crippled Children

Kazumi Nishiguchi and Giichi Misawa

#### Purpose

Recently the employment of crippled people has become more difficult, as the disabilities become severer. Therefore the vocational guidance for crippled children becomes more important.

Super D. E. proposed "the Vocational Developmental Theory", and he related as following: (1) self-concept plays an important role in vocational behaviors, (2) occupations are chosen as implementation of self-concept, (3) changes of vocational consciousness are parallel with changes of self-concept. On the other hand, it is pointed out that one of the personality factors of the crippled is the unrealistic attitude, which is exemplified in the choice of a vocation. It is said that the unrealistic attitude is derived from the inability of objective self-perceptions and acceptance of disabilities. So it is important for the crippled to have an appropriate self-concept in order to live a good vocational life.

The purpose of this study is a comparative investigation about vocational consciousness among following factors: (1) crippled children and normal children, (2) the high self-esteem group and the low self-esteem group in both crippled children and normal children.

#### Method and Procedure

The modified Vocational Readiness test (NIVR) was used as the questionnaire, which consisted of two parts to measure vocational interests and vocational confidences. Self-Esteem Inventory (SEI) was made to measure self-concept, and the inventory involved three categories—ability, sociality and psychology. The psychological category is intended to measure the acceptance of disability. These three kinds of tests were administered to 103 crippled children in high schools for the crippled and 117 normal children in high schools. According to the scores of SEI, the high self-esteem group and the low self-esteem group were constructed in both crippled children and normal children. Then the scores were compared between vocational interests and vocational confidences.

#### Results and Discussion

As to comparison with normal children, there were large differences in vocational interests and confidences, especially in the vocational clusters about business and service. From above, it seems that crippled children understand their own disabilities and they perceive the limitation of job-performances in their high school age.

Compared with the high self-esteem group and the low self-esteem group, there were large differences in most of the vocational clusters. So it was suggested that self-esteem might predict vocational behaviors. But the differences in crippled children were smaller than in normal children. It seems that crippled children don't connect their self-concept with vocational consciousness.